

大山郁夫における政治的デモクラシーと「文化国家主義」の提唱（上）

福井みどり

目次

はじめに

- 一 「国家的結合」の重視
 - 二 「政治的機会均等主義」の提唱（以上、本号）
 - 三 シンボルとしての「文化国家主義」（以下、次号）
- おわりに

はじめに

一九一〇年から一四年にかけてのアメリカ・ドイツ留学を終えて帰国した大山郁夫は、翌一九一五年一月二三日、早稲田大学に教授として迎えられることとなった。⁽¹⁾これ以後、「早稲田騒動」で一旦大学を去るまでの約二年半は、

大山郁夫における政治的デモクラシーと「文化国家主義」の提唱（上）（福井）

大山が学問的な研究・著作活動をもっとも行いえた期間の一つである。また、『中央公論』『新小説』や星島二郎の発行する『大学評論』⁽²⁾などの総合雑誌を舞台に、折から高揚しつつあった大正デモクラシーのオピニオンリーダーとして活躍をはじめたのもこの時期からであった。それは、総合雑誌が新聞に変わって論壇に大きな影響力をもちはじめたのと、ほぼ軌を一にしている。

この時期の大山は、長谷川如是閑が吉野作造らデモクラットを評して、「吉野氏らにとつては、政治の「観念」よりは、政治の現実がその関心であった。一言何かいっても、それが現実政治に反響しなければならないという責任を感じていたのであった」⁽³⁾と述べたのと同様であり、したがって学術論文と時事論との境界を見いだすことはむずかしく、総合雑誌に発表されている数多くの時事論も、彼の政治学者としての活動の重要な一角をかたちづくっていたのである。

本稿では、帰国後から一九一七年まで、すなわち大山の思想が社会的デモクラシーの導入へと変化を来すまでの時期に限定して、この間の大山の政治思想の二本の柱となる政治的デモクラシーと「文化国家主義」の、内実と現実社会での機能について考察を行っていききたい。なおそれ以後の時期については、拙稿「大山郁夫研究―社会的デモクラシーの受容と民衆的立場への接近―」（『国士舘大学政経論叢』第七二号、一九九〇年六月）において述べたので、参照されたい。

一 「国家的結合」の重視

大山の政治学的立場は、内ヶ崎愛天（作三郎）に請われて書いたという「我が政治道德観」と題する帰国後最初の論文（『六合雑誌』一九一五年三月）によく表れているように、「国家は道德的秩序を体现するものだ」と云ふ学説⁽⁴⁾に理想を見いだすものであった。すなわち政治における倫理的契機を重視しようとする「理想主義的」立場である。ところが第一次世界大戦下の国家間の弱肉強食が酷烈をきわめる渦中であつて、それが「毫も実際に当て簞らない」⁽⁵⁾ところに、大山政治学の苦悩と模索がはじまるのである。

大山によれば、近代になつてしだいに「社会的正義実現の曙光は閃めいて来た」が、「併し残念なことには、此現像は唯国内の政治上に発露するのみで、国際間の関係は依然として、道德の關係に依つてゝはなく、力の關係に依つて支配せられて居る」⁽⁶⁾という。したがつて、「国家の經濟上の利益を擁護するものは、究極は實力―即ち武力である故に、『力を養ふは国家の道德的義務なり』と言ふツライチュケ一流の学説の今尚ほ勢力を有するも無理ならぬ仕組である」⁽⁷⁾と述べて、力の論理を強調するトライチュケの説にも賛意を示し、国際社会におけるパワー・ポリティックスの支配を容認せねばならなかった。

このような認識は、マキアヴェリズムに対する一定の支持ともなつて表れている。大山がマキアヴェリに言及した論文に、「外交と道德」（『早稻田講演』一九一五年九月）、および「マキアヴェリズムと独逸の軍国主義」（『国家学会雑誌』一九一五年九・一〇月、経済研究会六月例会での講演録）があるが、後者において、以下のように述べられて

大山郁夫における政治的デモクラシーと「文化国家主義」の提唱（上）（福井）

いる。マキアヴェリという「ストロング・マン・セオリー」、つまり「力の崇拜、乃至偉人の意思の尊重」は今日もやは通用しないと斥けつつも、⁽⁸⁾「其国家の基礎として力を高調した一点は、今に其適用力を失はない」という。すなわち「苟くも国家の要素の中に力―法律上の觀念では主権と呼び、政治上の觀念では独立と称する力といふものが必然的に存在して居る間は、力を国家の定義の外に駆逐することは出来ない」のである。⁽⁹⁾そうして、「要するに彼れの公人道德の批評の標準は、先づ第一に国家の保全及び国力の充実の職務を果して居るや否やに在つた」のであり、⁽¹⁰⁾マキアヴェリはあくまで「国家生活の至善」を説いたのではなく、「或る特定の事情の下に、征服又は統治の目的を果たすには、如何なる手段を用ふるのが有効であるかを教へた」という。すなわち「彼は道德上の顧慮を全然考察の外に置いたのであ」り、「道德を蹂躪したのではなくて、之を問題外に置いたのである」⁽¹¹⁾と。

このマキアヴェリ理解は、そのまま大山の立場でもあった。大山は、道德が政治を支配する状態を理想としながらも、こと外交分野に関しては、理想と現実があまりに乖離している状況を前にして、ともかくも国家の「独立」を維持するという目的のために、比較考量の結果とりあえずは力を優先することに「理想と実際との調和」⁽¹²⁾を見いだすという合理主義的判断を行ったのである。ただし実際にこの時期、日本の独立がそれだけの危機に瀕していたとはいえず、ここで大山のいう「独立」維持は、帝国主義的膨脹をも含意していた点に問題を孕んでおり、この点はのちに詳しく検討する。

むしろ大山は、外交問題だけでなく、国内政治の問題にも無関心ではありえなかった。なぜならば、内側から国家を強固にすることは、「独立」維持のためにきわめて重要なことであつたからである。これは、東京専門学校・早稻田大学時代の師であつた浮田和民の立場を継承したものであつた。大山より一世代上の浮田や高田早苗ら「立憲的帝

国主義者」と称される人々もまた、帝国主義成立期の対外政策を支える国内体制の一環として、つまりナショナリズムを契機として立憲政治の導入を力説したのであった。⁽¹³⁾

それだけに一九一〇年に引き起こされた大逆事件や、第一次護憲運動をはじめとする民衆の台頭は、大山が危機感をもち、改めて国内政治に目を向ける要因であった。

大山は、「文化の程度の高き国民間に在りては、国家が或る限界を越えて精神上の自由を圧迫する時は、忽ち人民の反抗を促し、其極却て国家的統一を破るものであり、日本においても、「天草騒動」、そして大逆事件がその例であるという。しかしこのような「極端なる国家至上主義者」ゆえにもたらされる弊害が明らかになったからといって、直ちにその対極にある「極端なる自由主義者」が容認されるわけではない。日露戦後期からその萌芽が見られたように、集団に着目し、その共同性を追求するがゆえに、いまだけっして十分に獲得されたとはいえない個人の自由を制限する方向に向かうこととなる。大山によれば、「彼等は国家は個人のために存在して居るものであることを承認せよと要求して居るが、斯の如き契約説的論法の誤謬なることは、現今に於ては多く弁ずる迄もないことであ」った。つまり「人間は孤独で生活の出来ないものであつて、人の在る處に社会あり、社会のある處に国家が生まれる。国家は要するに権力的に組織せられたる社会であつて、共同生活の産物である」からである。⁽¹⁴⁾

そこで再び、両者の「中庸の道」が追求されねばならない。つまり「中庸」の肯定は、日露戦後の民衆の台頭と「二等国」の堅持という二つの課題を前にして、⁽¹⁵⁾個人の自由を擁護することにも国家主義にも徹しきれない立場を意味するものでもあつたわけで、大山はそのような自己の立脚点を固めるべく、次のような理論づけを行っていった。すなわち「主権と自由との限界に関し、抽象的に一般原則を設定せんとせば、政治社会に活動^(ママ)する人間の行為の動

機たる心理状態より出発せねばならぬ」とし、それを、「国家性純個人性、及び反国家性」の三つに分類した。まず「国家性とはその動機に於て国家生活の維持に貢献する心的作用であり、」^(ママ)「純個人性とは、（中略）只個人の個性發揮のための活動^(ママ)を促す意欲たる心的作用を指し」、⁽¹⁶⁾「反国家性とは其動機に於て既に国家生活の保全に危害ある心的作用であつて、其大部分は不純良個人性より成立つて居る」という。

大山の理解によれば、大逆事件は「反国家性」の表出の結果にほかならず、「無政府主義実行の手段の如きは国家を離れたる高き立場より見たる是非論は別として、国家生活より見れば疑ふまでもなく有害なるものであるから、国家は宜しく之に対して主権の制裁を加ふべきものである」⁽¹⁷⁾と断じて憚らなかった。

最初にあげる「国家性」が、大山が最も肯定的にとらえる「心理状態」にほかならない。⁽¹⁸⁾すなわちそれは、「国民の道徳を振興」することであり、そのためには「国家の統治関係が、倫理的基礎の上に即して居る」状態でなければならなかった。⁽¹⁹⁾その状態を引き出すためには、「政治上の権利行使」は「単に権利としてのみ見る」のではなく、「義務であると云ふことに依つて、始めて道徳上の意義が出て来るのである」⁽²⁰⁾とも述べている。

それを支えていたのは、当為としての国家と個人の関係についての楽天的見解であつた。国家と個人の間には何らの矛盾撞着もなく、「国家権力の正当なる行使は、私共の合理的意思の自由の限界を拡張するものと謂ふことが出来る」⁽²¹⁾というのである。これは、大山の権力に対する批判的視点の弱さを示すものであり、先に述べた個人の自由の軽視にも通じている。またそれゆえ大山は、民衆運動は国家と個人の倫理的紐帯の否定ないしは破壊を意味するものとして、否定的評価を下したのである。

一九一八年、「憲政三十年」を目前にして日本における立憲政治発達の足跡を振り返るなかで、第一次護憲運動に

ついても言及し、次のような評価を与えている。

素より憲政の改革の必要は、常に絶叫せられる。時としては憲政擁護運動といふが如き劇的興味に富める事件さへ突発することもある。けれども当該問題の核心に対する徹底的理解より沸き出づるに非らざる言説や、確固不拔の信仰及び之に伴ふ熱と情操に根拠するのではなくて、只単に唸嗟の衝動に依つて発作的に火花の如く生じ火花の如く滅する運動は、憲政の質実なる進歩のためには、比較的無意味のものたるに過ぎざることも亦、多く論ずるまでもない平明の道理である。⁽²²⁾

のちに大杉栄の批判をあびることになるように、このような評価は、政治的権利はもちろんのこと、国家との倫理的関係の前提である日々の生活の安息すら保証されていない民衆を度外視したものである。ここに倫理を第一とする『理想主義』の陥穽があつた。それは一つには、医者という「知識階級」の家に育ち、自らもまた「知識階級」の道を歩んできた大山が、まだ民衆とじかに向き合う機会を経験していないために、その問題を視野の外に置いているか、あるいは外在的にしかとらえていなかったことに起因していよう。

しかしすでに見たように大山は、自らも大逆事件を引き合いに出して警鐘を鳴らしているように、国家のもつ抑圧的側面にまったく盲目であつたというわけではない。留学以前にも国家による儒教主義的道德の強要には批判的であつたし、この時点でもまた、「明治の晩年」に政府が「神社崇拜を勧説し、或は家族制度の復興を計り、或は三教会同を試みたりなどし」たことを、「伝統的神秘的権威の失墜」による「反動的復旧的手段」としてとらえていた。ところがそれは「時に既に遅れて居た」のであつて、時勢はもはや「封建思想」から「新功利主義」へと移りつつある⁽²³⁾、国家による精神的自由の抑圧の側面は、過去の残存物としてしか問題にされていない。ここに、留学以前の

論文に多用されていた社会進化論の痕跡を見いだすことができる。大山は「自由観念」を、「個人生活を或る程度まで国家の干渉より独立せしめんとする、云はゞ消極的自由観念」と「参政権の獲得を計ると云ふが如き積極的自由観念」の二つに大別し、今日は後者の近代的デモクラシーの時代であるとして、前者は後景に押しやつてしまったのである。⁽²⁴⁾

そうして国家からの個人の解放という遠心的要素よりも、個人を道徳に基礎づけられた国家という共同体に結合させることに、主力を投入していく。そのシンボルとして提唱されたのが「文化国家主義」であり、また、「文化国家」を支えるための制度的措置として、政治的デモクラシーが主張されていくことになる。

二 「政治的機会均等主義」の提唱

その際のモデルとなったのが、欧米の都市であった。大山は留学する以前から、都市一般を儒教道徳から解放された自由な精神の発露の場として位置づけていたが、留学によってシカゴ、ミュンヘンをはじめとする欧米の都市を見聞したことによって、都市への関心をいっそう強めることとなった。

帰国後まもなく執筆された「都市意識」と題する論文（『早稲田講演』一九一五年四月）では、「都市は国家と個人の中間に存在する一団体であつてツライチュケの曰へる如く、都市なり、其他の自治体の政治生活は国家生活の最初の予備学校である」と述べ、なかでも欧米の都市に見られるという「家族的情緒」や「協同親和の要素」に注目する。⁽²⁵⁾ ここにもまた大山の、道徳を基礎とした共同的結合への関心の強さが示されている。「家族的」である以上、そこで

は「男子よりは寧ろ婦人小児の利害を包含して居」なければならず、その大山の性向ゆゑに社会的弱者にも目配りがなされることになる。

さらにその後書かれた論文「都市生活の家族的情緒」(『新小説』一九一六年五月)では、次のように述べられている。「願くは我国の将来の都市生活に、家族的情緒乃至親隣感情を注入若くは増進せしめたい。市吏員の腐敗行為摘発や、市、区会議員の選挙上の政戦や、市当局者の計画施設等に対抗する示威運動又は市民大会や、投石や焼打などのみに団結若くは烏合する市民の政治生活の、何ぞ荒涼、殺伐、無風流なるや。市民生活は都市の一國文化の上に有する使命上よりして、原則としては暢和闊達で且つ家族的でなければならぬ」(27)。ここでも、前述の立場にもとづき民衆運動に対する否定的見解が表明されている。

しかも民衆運動に対してのみならず、権力者にも厳しい注文がなされる。政治的腐敗等の非道德的行為はいうまでもなく、日本の神社仏閣などに立てられている「嚴禁」「べからず」といった告示板は、「如何に権力を赤裸々に表示して憎さげに人民を威嚇して居るか」(28)との批判を呼び起こした。

大山は、「我国に於て都市といふ語が一種の魅力を有するに至ることが将来の問題であらう」(29)と述べており、直ちに日本において、欧米のような市民生活を実現しようと考えてはいなかった。しかしながら他方で、当面早急に学びとるべきは、そこに溢れる、新たな環境を創り出していく能動的な精神であった。「政治を支配する精神力」(『中央公論』一九一六年四月)をはじめとする各論文には、随所にそれを追求する姿勢が見られる。大山は次のようにいう。「国家は単に環境の産物たるに止るものでない。国家又は地方自治団体は、国民精神若くは市民意識に依りて、終始環境を改造若くは創造しつゝあることは、吾等が常に国家生活及び都市生活の上に於て目睹する所である。殊に近年

欧米の諸都市が、自然の環境を支配して、市民の物質生活并に精神生活の上に新境地を開拓せんとする努力は、傍觀者の驚嘆心を唆る一種のローマンスである」と。⁽³⁰⁾さらにこうも述べる。「概言すれば、新環境を個人生活及び団体生活の上に創造せんとすることが、現代人の生命である。「生の創造」と言ふことは畢竟此意味に外ならぬ。而して此創造的事業の発動機は、意思精神の力である。団体生活の場合に於ては、市民的精神或は国民的精神の力である。政治を支配する最終の力は此精神力である」。⁽³¹⁾すなわち国民は、所与の環境の下にあるのではなく、それを創りかえていこうとする積極的な政治参与の姿勢の上にはじめて、倫理による国家と個人の「理想的な」関係が生じるというわけである。

このような立場は、唯物史観と相い入れるものではなかった。「政治を支配する精神力」という論文は、唯物史観を強く意識して書かれた論文であり、大山はそれへの批判を次のように展開している。

歴史の進展を唯物的見地より解釈せんとする徒は、斯の如き状態を見て、直に形而下の現象が人類の政治を支配する唯一の要素であると説明する傾がある。無論彼等と雖も、斯る形而下の環境の上に作用する人間の意思の力を認めない訳ではないが、彼等に云はせれば、斯の如き人間の意思の力も亦、其環境の自然現象の結合の關係より生ずるものである。彼等は一切の人事を唯物的基礎の鑄型に流し込まねば承知の出来ぬ、思想上の統一論者である。（中略）之れを政治の上に適用すれば、国民的向上心は究極に於てパンの問題に歸し、デモクラシーとは特権階級の経済的資源の壟断に反抗する一般民衆の喚叫である。視来れば其根柢に何等の倫理的基礎なく、高尚と云ふも下賤と云ふも、つまりは人間が得手勝手に設けたる標語に過ぎぬ。⁽³²⁾

このような唯物史観の立場は、「個人が徹頭徹尾環境の奴隷たるを以て終始する」ことにほかならず、そこに「世に

進歩といふもの、あるべき筈はない」という一面的理解に立っていた。⁽³³⁾

それでは、そのような国民の間から迸り出る「環境改造」への意欲をどのように汲み上げていくかといえ、代議制度の下で選挙権を拡大し、国民の政治参加への道を切り開いていくことであった。すなわち、「我國民の政治意識に覺醒せる範圍は、縦し西洋諸國民に比して狭小なりとするも、苟くも其覺醒せる範圍内に於ては、此不可抗の渴求が潛勢力としての、鬱勃として横溢して居ることは理論及び事實の共に証明して居る所である。而して此不可抗の渴求の安全弁は代議制度であり、而して又其理想よりすれば議院政治である」という。⁽³⁴⁾ 물론 大山は、「我等は國民精神 (Volksgeist) を離れて法律制度を解釈することは出来ぬ」とするものであったから、けっして代議制度を唯一絶対のものとは考えず、「國民精神」のあり方の變化に應じて新しい制度を受け入れる余地を残してはいたが、当面は、「近代のデモクラシーの要求を充たす上に於て、これ以上に有効なる名案が提供せらるゝまでは、之をして益す進むべき所に進ましめ、發達すべき所に發達せしむることを務むべきは、現代政治人の義務であると謂はねばならぬ」と考えていたのである。⁽³⁶⁾

普選についても大山は、欧米社会の見聞を経て、帰国以来常にその必要を認識していた。次のように述べる。

筆者が欧米、殊に米國に居た時、選挙季節には、老若男女、有識無識の差別なく、皆悉く各党派の宣言書や、候補者の適否を批判して居るのを見て、小僧は小僧なりに、お三どんはお三どんなりに、黒人は黒人なりに、それ相應に國家なり地方自治體なりの政治に對して、興味と責任とを感じて居るらしく見えるのを見て、笑ひ事じゃないと思つて、窃に歎稱した事は一再でないのである。⁽³⁷⁾

一九一六年三月に發表された論文「政治的機會均等主義」(『新小説』) もまた、「政治的機會均等主義は、どこまで大山郁夫における政治的デモクラシーと「文化國家主義」の提唱(上)(福井)

も国家の倫理的基礎を鞏固にし国家的結合を確実にし、以て国際政局の競争場裏に叫号せんとするものである」という部分に明瞭に示されているように、ナショナリズムの立場から政治的デモクラシーの必要を説きおこしたものであった。大山のいう政治的デモクラシーの帰結が、普選であることは疑いない。そして大山は、「言ふ迄も無く立憲政治は、デモクラシーの根柢に立たねばならぬ。普通選挙と言ふことは、立憲政治の是認に於て、其必然の結果で無ければならぬ」⁽³⁹⁾とも明言した。

「政治的機会均等主義」の論文が掲載される二カ月前の一九一六年一月には、吉野作造の「憲政の本義を説いて其有終の美を済すの途を論ず」が『中央公論』に掲載されており、周知のように吉野はここで普選の重要性を公然と主張し、その後のデモクラシー運動に理論的基礎づけを与えたのであった。大山のこの論文も、吉野のそれに触発されて、欧米留学以来あたためていた考えを開陳したものと考えられる。

ところがそれは理想上のことであって、日本において普選を即実施することには、少なからず躊躇を示したのであった。大山は、「理想としての普通選挙制を主張し、当面の急務としては、此理想に到達する一段階として選挙資格の財産上の制限をせめては直接国税五円に、その住居上の制限をせめては六箇月に引下げんことを要求するものである」⁽⁴⁰⁾という地点にとどまっていた。

普選即行論を唱えることを踏みとどまらせた要因は、具体的に次の点に求められよう。

まず第一に、大山の「民衆自身の無智、無訓練」⁽⁴¹⁾という認識にあった。「立憲政治の完成は、個々の市民の人格の涵養より着手せねばならぬ」⁽⁴²⁾との認識に立つ大山は、そのような状態に対して、民衆の「政治的啓発及び政治的訓練」の必要を力説した。⁽⁴³⁾大山にとって選挙権を与えることは、すでに見てきたように、個人を政治の主体たらしめる

ことにより国家につなぎとめるための手段であつて、国民が生まれながらにしてもっている基本的権利ではなかつた。それゆゑ、「人格の涵養」を経て政治的「能力」を身につけた者のみが有権者であつてもかまわないのである。

しかもその民衆に対する評価は、単に具体的な事実に即してのみいわれているのではなく、欧米と比較しての、日本を含む「東洋」の民衆一般への蔑視がそれを補強していた。この点は、すでに引用した部分からも明らかであるが、さらに以下の部分に、より顯著に示されている。

我國の民衆運動の、其声の大なる割合に其効果の不十分なることも亦事實である。(中略) 我國に於ては一般民衆の自由慾及び權勢慾の潜伏期が過度に永かつた、め、不使用の結果退化したものであらう。而して一般東洋人の欠点たるメカニズム使用の拙劣の特性が此等の精神的慾求の有効なる發現方法の発見を一般民衆に拒んだ事實も、之が主要なる原因の一を構成して居たのであらう。⁽⁴⁴⁾

そしてこのような「東洋」に対する潜在的な蔑視観ゆゑに、日本のアジア侵略を肯定することにもなつたと考えられるが、この点はのちに考察することにしよう。

また、女性の参政權についても同様であつた。すなわち、女性の問題を視野にいれ、「理想としては婦人の参政權をも包含して居るものである」としながらも、「全体として見たる婦人の参政權に対する要求及び参政權行使の實際上の能力(婦人の政治的智識上及び実生活に於て有する地位上の)程度及び範圍を參酌して」⁽⁴⁵⁾排除せざるをえないということになる。

第二に、實際にこの時期、立憲同志会と与党として一九一四年五月に成立した大隈内閣は、選挙權拡大にはまったく関心を示さず、政党の側もまた、立憲国民党が第三・三七議會に選挙權拡張案を提出したのみで、それすらも委

員会で審議未了となつてしまふありさまであつたことによる。一九一一年の第二七議會において一度は普選法が衆議院を通過したにもかかわらず、第一次護憲運動の盛り上がり以後、急速な民衆勢力の台頭に危機意識を強くした政党は、民衆の政治参加に対して消極的姿勢に転じてしまつたのである。⁽⁴⁶⁾

女性参政権の要求も、一九一一年には『青鞥』が創刊されて女性問題がしだいに論壇の脚光を浴びるようになり、参政権それ自体も、河田嗣郎、馬場孤蝶、そして『第三帝国』の姉妹誌である『女王』などによって主張されてはいたが、まだ運動が成立するまでにはいたつておらず、それは新婦人協会結成以後に待たねばならなかつた。⁽⁴⁷⁾したがつて大山もまた、このような状況の下では普選の実現はとうてい望めないとの現実追隨主義に陥り、そのことが普選即行論に踏みきる意欲を減退させていたと考えられる。

国民全体を政治の担い手と見なしえない段階にあつては、それと表裏一体となつて「英雄」に対する期待が持続されていた。「今日の大国家に於ても、政權を行使する為政者に優秀者を挙げべき必要は毫も減退しないのみならず、益々増加してゐる」と述べて、いまだ「英雄」の存在を否定しきれないでいたところに、大山の民衆觀の弱さもあつたのである。この点は周知のように、「指導者」としての「少数賢者」と「監督者」としての「一般の民衆」に峻別した吉野作造の「哲人政治」と共通するものであつた。「英雄」の必要性は、カーライル著『英雄崇拜論』の影響を受けて、日露戦後期以来、大山によつて繰返し主張されてきた。とはいへこのころになると、大山もまた、もはや民衆の動向が政治を推進する力として無視しえぬまでに成長してきていることを認識していた。大山は、「少くとも英雄は先づ時勢を作らなければ、如何なる事業をも成就することは出来ぬ。併し今日では時勢が英雄を作ると云ふ方が、より多く真実である。時勢とは何ぞやと云はゞ、今日に於ては要するに街頭の群衆の意嚮と、此意嚮を貫徹しよ

うと云ふ彼等の意気込である」⁽⁴⁹⁾と述べている。すなわち、「英雄」の位置づけは、「時勢」によって、換言すれば民衆によって左右されるところにまで後退していた。徐々に、政治を動かす主体としての民衆を認めつつあったといえよう。

その「英雄」にかわる役割を期待されたのが、当面は政党であった。大山は、「多数人民の意思を国家政策の上に表現するための方便として、実行し得べき最良のもの」として政党の役割を重視していた。⁽⁵⁰⁾ただし、「政党は政治上の智識と徳操との欠乏せる国民の間には、専制治下に起る弊害よりも更に大なる弊害を齎らし来る虞れがある」と考えられており、政党の効能を発揮するためには、その監督者である国民の「人格の涵養」が重要となってくるのである。⁽⁵¹⁾したがって大山は、「我等は政党の善悪よりも寧ろ国民の善悪を問ふ必要がある」とさえいうのであった。

政党に対して、非立憲的存在である「元老、官僚及びその牙宮たる貴族院及び枢密院の勢力を制肘する」⁽⁵²⁾役割も期待された。そうして大山は、参政権を獲得した「有能な」国民の監督の下に、二大政党が樹立され、日本において政党政治が実現することを期待した。早くも大山は、「欧州戦乱後に来るべき世界の政治的改造期」を予想し、そこに希望を託していたのである。⁽⁵³⁾

大山の政党への期待は、「近代的広告術としての三党首会談」(『中央公論』一九一六年七月)、「与党合同問題の再燃」(前掲)、「二大政党制樹立の機運」(前掲)などの一連の論文に示されているように、大隈内閣が中国政策の失敗等で元老からも見放されてその崩壊が決定的となり、一九一六年六月に枢密顧問官三浦梧楼の斡旋によって、立憲同志会の加藤高明、立憲政友会の原敬、立憲国民党の犬養毅による三党首会談が開かれたところから急速に高まっていく。大山は、「三党首会合の覚書が大に当ったのは、其中に『外界一切の容喙を許さざる事』を、無遠慮に言つて退け

た、めである。此宣言の目指して居るものは、直接には元老の不当の勢力である⁽⁵⁴⁾と述べて、三党首会合を政党による元老排除のデモンストレーションの成功と評価し、さらに同じころ、大隈内閣の与党を構成している同志会・中正会・公友倶楽部の三派が合同して、加藤高明を首班とする内閣を構想していることについても、「政党内閣制度の基礎たるべき二大政党樹立の情勢が馴致せらるゝに至らん⁽⁵⁵⁾」との希望を託した。この計画の中心人物の一人に、早稲田大学時代の恩師で時の文相であつた高田早苗が加わつていたことも、いっそう期待を大きいものにしてゐたと思われる⁽⁵⁶⁾。

ところが、結果は大山の期待を大きく裏切るものであつた。三党首会談は、加藤高明の消極的態度によつて威力を発揮できず、原敬もまた、政党内閣を成立させることよりも、山県有朋ら元老に接近することによつて、大隈内閣の下で後退を余儀なくされた自派政友会の勢力挽回を図る途を選んでいく。三派合同加藤内閣構想も、加藤内閣の擁立には失敗して、寺内軍閥内閣を誕生させることとなり、三派の合同は、寺内内閣成立後に、同志会、中正会、公正倶楽部の合同によつて憲政会として結実を見るにとどまつた。政党にまったく基礎を置かないこの寺内内閣の成立は、大山のいっそう厳しい批判を呼び起こすことになる。

注

- (1) 『教授会議員名簿 早稲田大学』（早稲田大学学史編集所蔵）、および『早稲田学報』（一九一五年二月）一二頁。それ以前の大山についてはとりあえず、藤原保信・黒川（福井）みどり「大山郁夫の生涯・幼少年時代・初期著作について」

〔早稲田大学現代政治経済研究所「研究ノート」第三号、一九八五年六月〕、および黒川「日露前後の大山郁夫」〔『日本歴史』第四五七号、一九八六年六月〕を参照されたい。また最近公表された史料から明らかになった重要な点については、黒川「大山郁夫関係資料について―大山家寄贈資料を中心に―」〔早稲田大学現代政治経済研究所「大山郁夫とその時代」グループ、一九八九年一〇月〕において述べた。

- (2) 『大学評論』は、一九一七年に、当時東京帝国大学の学生であった星島二郎らによって創刊された。そこには、星島の属していたユニテリアン教会のメンバーをはじめ、小山東助・北沢新次郎・宮崎龍介・石本恵吉、そして大山らが集った〔伊藤隆『大正期「革新」派の成立』一九七八年、塙書房、四八頁〕。

- (3) 長谷川如是閑「吉野作造博士と彼らの時代」〔飯田泰三・山領健二編『長谷川如是閑著作集』一九八九年、岩波文庫〕三
四六頁。

- (4) 大山郁夫「我が政治道徳観」〔『六合雑誌』一九一五年三月〕四七頁。

- (5) 同上、四七頁。

- (6) 同上、四六頁。

- (7) 同上、四七頁。

- (8) 大山郁夫「マキアヴェリズムと独逸の軍国主義」〔『国家学会雑誌』一九一五年九月〕一五二―三頁。

- (9) 同上（九月）、一五四頁。

- (10) 同上（一〇月）、一〇一頁。

- (11) 同上（一〇月）、一〇二頁。

- (12) 早稲田大学大学部政治経済科第壹回生級友会『金蘭簿』（一九〇五年五月）六〇頁。

- (13) 栄沢幸二「浮田和民の思想的特質」〔同『大正デモクラシー期の政治思想』一九八一年、研文出版〕一一九頁。栄沢氏は、大山や吉野作造ら民本主義者との「決定的な違い」は、「民本主義者が帝国主義にたいする否定的見解を強めていった」とにあるというが（同上）、大山においては、のちに示すように第一次大戦期までは帝国主義論において、浮田らとほぼ同じデオロギー的位置にあったのである。

- (14) 大山郁夫「近代国家に於ける政論の地位及使命」〔『新小説』一九一六年一二月〕二六―七頁。

大山郁夫における政治的デモクラシーと「文化国家主義」の提唱（上）（福井）

(15) この二つの課題を松本三之介氏は、「民衆の登場」と「世界への志向」と表現する（松本「Ⅳ 大正デモクラシーの知的構造」・同『近代日本の知的状況』一九七四年、中央公論社、一一七頁）。

(16) 前掲「近代国家に於ける政論の地位及使命」、三二―四頁。

(17) 同上、三三頁。

(18) ここに、大山がかつて学んだルボンの影響の下、政治学への心理学の応用の足跡が見られる。

(19) 大山郁夫「支那国体変更問題と五国の勸告」（『早稲田講演』一九一六年一月）五八―九頁。

(20) 前掲「我が政治道徳観」、五一頁。

(21) 大山郁夫「所謂独謂文化宣伝政策の主張を批評す」（『日本社会学院年報』一九一六年一月）八七頁。

(22) 大山郁夫「憲政三十年の獲物」（『中央公論』一九一八年三月）九七頁。

(23) 大山郁夫「二大政党樹立の機運」（『新小説』一九一六年一〇月）二四頁。

(24) 大山郁夫「街頭の群衆」（『新小説』一九一六年二月）一七頁。

(25) 大山郁夫「都市意識」（『早稲田講演』一九一五年四月）八七頁。

(26) 同上、三〇頁。

(27) 大山郁夫「都市生活の家族的情緒」（『新小説』一九一六年五月）三〇―一頁。

(28) 同上、三〇頁。

(29) 前掲「都市意識」、九三頁。

(30) 前掲「政治を支配する精神力」、一二頁。

(31) 同上、二三頁。

(32) 同上、二〇頁。

(33) 同上、二二頁。

(34) 同上、三〇頁。

(35) 同上、二八頁。

(36) 同上、三一頁。

- (37) 前掲「我が政治道德観」、四九頁。
- (38) 大山郁夫「政治的機會均等主義」(『新小説』一九一六年三月) 二五頁。
- (39) 大山郁夫「上院改革か下院改革か」(『新小説』一九一六年五月) 六頁。
- (40) 大山郁夫「政治と生活」(『新小説』一九一六年九月) 三八頁。
- (41) 前掲「街頭の群衆」、二二頁。
- (42) 大山郁夫「都市自治と協同的精神」(『新小説』一九一六年六月) 二四頁。
- (43) 前掲「街頭の群衆」、二二頁。
- (44) 前掲「街頭の群衆」、二〇―一頁。
- (45) 前掲「政治的機會均等主義」、二二頁。
- (46) 松尾尊允「普通選挙制度成立史の研究」(一九八九年、岩波書店) 一〇五頁。
- (47) 同上、三三八―九頁、参照。
- (48) 前掲「政治を支配する精神力」、三六頁。
- (49) 前掲「街頭の群衆」、一〇頁。
- (50) 大山郁夫「憲政治下の政党と国民」(『新日本』一九一五年十月) 三七頁。
- (51) 同上、三八頁。
- (52) 「与党合同問題の再燃」(『新小説』一九一六年一〇月) 五頁。この論文は、「戸陵隠客」の筆名で書かれたものであるが、内容・用語等から大山の著作と認定した。この筆名は、一九一六―七年に、おもに『新小説』の「時論」執筆の際に用いられた。また一九一八年から翌一九九年のはじめにかけて発表されたものには、しばしば「戸陵隠士」と称しており、これについても同様である。なお、一九二〇年以後は一切筆名は用いていない。
- (53) 大山郁夫「二大政党制樹立の機運」(『新小説』一九一六年一〇月) 二六―八頁。
- (54) 大山郁夫「近代の広告術としての三党首会談」(『中央公論』一九一六年七月) 七五頁。
- (55) 前掲「与党合同問題の再燃」、三頁。
- (56) 大山は、「此運動の中心に立つて歴代の伴食大臣とは聊か異つた色彩を發揮して居る高田文相は、学制改革案の慘憺たる

末路に関連する失敗挽回策の第一着歩としても、必死となつて乗り掛けた船を彼岸に漕ぎ寄せねばなるまい」（同上、八九頁）と述べている。大山が水野りゆうと結婚するに当たり、その仲介をしたのが高田であった（前掲拙稿「大山郁夫関係資料について」、一一頁を参照）。